



TITLE:

均田法の名稱と實態について

AUTHOR(S):

曾我部, 靜雄

CITATION:

曾我部, 靜雄. 均田法の名稱と實態について. 東洋史研究 1967, 26(3): 247-281

ISSUE DATE:

1967-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/139068>

RIGHT:

東洋史研究

第二十六卷 第三號 昭和四十二年十二月發行

均田法の名稱と實態について

曾 我 部 靜 雄

一 井田法の概要

中國の古代の夏・殷・周時代には、土地の公有にかかる井田法が行なわれたと伝えられておるが、この井田法については、既に我が徳川時代に先哲によって數多くの研究がなされており、また大正年間には、服部宇之吉博士著『支那研究』に收められている「井田私考」と、加藤繁博士著『支那古田制の研究』の二大雄篇が現われるなど、我が國では昔から非常に多く研究された土地法である。私も既にこの法については、拙著『均田法とその稅役制度』や雜誌『文化』第二七卷第三號所載の拙稿「北齊の均田法——西嶋定生氏の駁論に答う——」で私の考えを述べてある。この井田法は、中國中世の土地法であるところの所謂の均田法と斷ち切ることの出来ない關連性を持つているから、均田法を述べるに當っては、立論の順序として、先ず以て井田法の概要を明らかにして置く必要がある。この意味において、私は本論文の初めに井田法を取扱うのである。

井田法を最も詳しく傳えているのは周禮であり、これにつづくものは孟子である。しかもそれは主として周の井田法に

て、周禮秋官司寇篇の郷土の職掌に「郷士掌國中」とある國中に對して、鄭玄は其地則距王城二百里内也、言掌國中、此主國中獄也、六郷之獄、在國中、

と註していて、郊即ち六郷の地までをも國中と言う場合があることを説明している。然らば、國中の外の百一里からの地域は何んと稱せられたかと言うに、これは野と總稱された。周禮地官司徒篇の遂人の職掌の所に見える鄭玄の註には、

郊外曰野、此野爲甸・稍・縣・都、

と述べて、郊即ち國中の外は野と總稱することを明らかにしている。

このように國王の直轄地の方千里、換言すれば都城を中心として四方へ五百里の地域は、大きくは國中即ち郊と野とに區分されたのである。この國中即ち郊と野とに井田法を實施するに當つては、その實施の方法を異にしたのである。それは孟子の滕文公章句上篇に、

請、野九一而助、國中什一使自賦、卿以下必有圭田、圭田五十畝、餘夫二十五畝、死徙無出郷、郷田同井、出入相友、守望相助、疾病相扶持、則百姓親睦、方里而井、井九百畝、其中爲公田、八家皆私百畝、同養公田、公事畢、然後敢治私事、所以別野人、也、此其大略也、

と述べてあり、この一文の最初の「野は九一にして助し、國中は什一にして自から賦せしむ」とあるのは、野では九一にして助する井田法が行なわれ、國中は什一にして自から賦する井田法が行なわれると言うことを意味するのであって、野と國中とは、相異なる井田法が實施されたことを明らかにしたものである。その野は九一にして助すると言うのは、一井九百畝を九等分して、その中央の百畝を公田とし、残りの八百畝を百畝づつ八家に分けて私田とし、八家が公田百畝を共同耕作して、その收穫物を公課として上納するの言うのであって、九百畝の中の百畝の收穫物を公課とするから、九一即ち九分の一の税となるのである。これを助と言うのは、次に引用せる孟子に「助者、藉也」とある如く、藉かすと言う意味であつて、これに對する後漢の人・趙岐の註は「藉者、借也、猶人相借力助之也」と言い、民衆が公家に力をか

し、公家を助けて百畝の公田を耕作するから、助と稱するのであると説明している。かくてこの公田を設ける井田法は野の地域で行なわれるというのである。その國中は什一にして自から賦すと言うのは、一井九百畝を全部私田として、九家に百畝づつ分配し、各家は私田百畝を耕作して、その收穫物の什一即ち十分の一を公課として上納するの言うのである。つまりこれは公田を設けない井田法であり、これは國中の地域で實施されたものである。その自から賦すと言うことは、自から賦税とすると言うことに他ならず、趙岐はこれを貢と同義のものとしている。

このようにして孟子の傳える井田法は、公田のあるものと無いものとの二種であつて、公田のあるものは野で行なわれ、公田の無いものは國中で行なわれるとなつてゐるが、孟子はまた同じ滕文公章句上篇の所で、

夏后氏五十而貢、殷人七十而助、周人百畝而徹、其實皆什一也、徹者徹也、助者藉也、

と言ひ、公田の無い貢法、即ち自から賦する法は、夏において行なわれた井田法であり、公田のある助法は殷において行なわれた井田法であり、周は兩者を徹して、即ち兩者を通じて、二つとも行なつたと述べてゐる。なお鄭玄も周禮多官篇考工記の匠人の所に註して、

以「載師職及司馬法」論之、周制畿内用「夏之貢法」、税「夫」、無「公田」、以「詩・春秋・論語・孟子」論之、周制邦國用「殷之助法」、制「公田」、不「税」夫、貢者、自治「其所」受田、貢其稅穀、助者、借「民」之力、以治「公田」、又使「收斂」焉、畿内用「貢法」者、鄉遂及公邑之吏、且夕從「民事」、爲「其」促之、以「公使」不「得」恤「其私」、邦國用「助法」者、諸侯專「一國」之政、爲「其」貪暴「稅」民無「藝」、

と言ひ、周の井田法では、國王の直轄地である畿内方千里の地域では公田の無い夏の貢法に類する井田法が行なわれ、封建諸侯の國々では公田のある殷の助法に類する井田法が行なわれたと述べ、更にまた國王の直轄地と諸侯の國々で相異なる井田法を實施する理由をも説明しているが、これは既に述べてある如く、孟子の滕文公上篇の一文により、國王の直轄地内において、公田のない夏の貢法と、公田のある殷の助法の二つの系統による井田法が行われたと見做すべきであらう。

う。いずれにせよ鄭玄も周の井田法には、公田のあるものと無いものとの二つの型の井田法があったことは認めているのである。

このように周において行なわれた井田法には、二つの種類のものがあつたと言われるが、いずれの場合にも民衆に與えられる私田は、百畝が基本單位であり、一年休耕、二年休耕の土地では、更に百畝乃至は二百畝の田土が増して與えられるのであつて、民衆はこの私田の使用利益が許されたのである。公家がこの私田を民衆に班給するに當つては、その班給の基準は何に置いていたかというに、これについては服部宇之吉博士の「井田私考」には、

即ち授田の標準は夫妻を以て一單位と爲す、周禮等に所謂餘夫とは男子丁年に達して未だ妻を娶らざる者を云へるなり。丁男の妻を娶りし者は正夫として完全なる權利を得、未だ室を有せざるものは餘夫として一部分の權利を得るのみ。然らば則ち丁年の標準如何、周禮卿大夫の職に國中自_ニ七尺_一以及_ニ六十_一、野自_ニ六尺_一以及_ニ六十有五_一、皆征_レ之とある、七尺及び六尺は即ち丁年に達したる者にて六十以上及び六十五以上は丁年の過ぎたるものなり。征は役に應ずることなり、國家故無くして民を役するものにあらず、既に役に従ふ以上は必ず之に對して相當の權利を與ふ。即ち國にありては七尺以上、野にありては六尺以上の者は田を受くるの權利を享有し、此の權利に對して征役に従ふの義務を負ふ。但し其の丁年に達したるのみにて未だ室を有せざる者は未だ完全の權利を享有するを許されず、故に餘夫と云ひて正夫と區別す。權利既に完全ならざるを以て征役に従ふも亦限り有り、周禮による大田役等にあらずれば餘夫悉く起ること無きは是なり。(中略) 授田の標準は丁年に達し室を有する者を正夫とし、之に完全なる一夫の權利を與ふるにあり。云云。

と述べている。この服部博士の説明は、井田法における授田の原則を遺憾なく論斷したものであると共に、その後身であるところの晉の占田・課田法から始まるいわゆる均田法の授田の鐵則でもある。井田法における授田の基準は、丁男であつてしかも妻を娶つて室を構えた一夫妻を一つの單位として私田百畝を與え、丁男ではあるが妻を娶つておらない者は餘^⑨

夫と稱し、授田には預かるがその受ける面積は百畝より少ないものであると言うのであり、これ等の授田に對する民衆の公家への反對給付の絶對的のものは何かと言え、それは力役であり、その力役も室を構えている正夫は全量を負擔するが、餘夫は全量を負擔しないと言うのである。室を構えた一夫婦は夫家と稱せられた。それは周禮地官司徒篇の遂人の職掌に、

以三歲時一登其夫家之衆寡、及其六畜車輦、

とある夫家に對して、鄭玄は「夫家猶言男女二也」と註していることによつて判るが、また時には單に夫とも稱せられた。それは矢張り同じ遂人の職掌に、

上地夫一廛、田百畝、萊五十畝、餘夫亦如之、

とあるこの夫に對する授田に、鄭衆は「戸計一夫一婦而賦三之田」と註しており、また孟子の萬章章句下篇に、

耕者之所獲、一夫百畝、百畝之糞、上農夫食九人、

とある一夫百畝に對して、趙岐は「一夫一婦、佃田百畝、百畝之田、加之以糞、云云」と註していることによつて判るであらう。

室を構えている丁男に與えられる百畝の田には、以上の夫家とか夫の説明によつて判る如く、妻の取得分も含まれているのである。しかるに夫と妻の取得分を別々にして記載せず、單に夫のみに與えるように記載しているのは、女たる妻には授田に預かる資格がないからである。それは授田に預かると力役に從う義務が生ずることは、既に述べたところであるが、女はこの力役が科せられない、科してはならない階級であつた。詩經の大雅篇瞻卬の詩に、

婦無公事、休其蠶織、

とあるのも、婦人は國家の力役は免除されていて、専ら家庭に在つて蠶織に力むべきものであることを述べたものである。服部宇之吉博士はその「井田私考」の中で「婦女は固より征役に從ふべきものにあらざ」と説明されている。このよ

うにして、女には力役が及ばないから、従つて授田に預かる資格も無いわけである。

室を構えた一夫が得る私田百畝は、農耕地であるから、家屋を建てる敷地は、別に與えられた。孟子の梁惠王章句上篇や盡心章句上篇に、

五畝之宅、樹之以桑、五十者可_レ以衣帛矣、鶏豚狗彘之畜、無_レ失其時、七十者可_レ以食_レ肉矣、百畝之田、勿_レ奪_レ其時、數口之家、可_レ以無_レ飢矣、(梁惠王章句上篇による)

とあるのや、荀子の大略篇に、

家五畝宅、百畝田、務_レ其業而勿_レ奪_レ其時、所_レ以富也、

とあるように、宅地として五畝が與えられることになっていた。この五畝の地はただ家を建てるばかりでなく、各家が養蠶のための桑を植えたり、或は家畜を飼養したり、野菜を栽培する場所に使用することも可能であつた。かくして私田百畝と宅地五畝とで、人類が生活するには事かかぬように配慮されて授田されていたのである。

公家から土地の班給をうけた民衆は、これによって公家に負う義務には、力役があることは既に述べたが、この外にもあつた。孟子はその盡心章句下篇で、

有_レ布縷之征・粟米之征・力役之征、君子用_レ其_一緩_レ其_二、用_レ其_二而民有_レ殍、用_レ其_三而父子離、

と述べており、布縷・粟米・力役の三公課があるを明らかにしているが、この三種の中で力役は土地の班給に預かる丁男が負うべきものであり、粟米は班給農耕地の田租であるは論を俟たないことであるが、布縷は穀類のみを栽培する私田では生産されないものである。これは養蠶によって作られるものであるから、桑を栽培する五畝の宅地があつて初めて可能なことである。この宅地の班給に預かるのは、室を有する丁男であるから、室を有する、換言すれば戸を構えている丁男が負擔する公課であつて、室を持たない餘夫は負擔しない公課である。即ちこれは戸を客體とする公課である。戸を客體とする公課は、晉の占田・課田法に始まる均田的な土地法では、戸調即ち調として存在するが、均田的な土地法では、こ

の調の外に公課として租と力役とがあった。この調と租と力役の三種の税役は、井田法の上記の布縷の征・粟米の征・力役の征とは、全く同一種類、同一性質のものであるは、兩者を比較することによって容易に知り得るが、中國中世に行なわれた均田的な土地法は、土地制度そのものが井田法の原理を繼承しただけでなく、その土地制度に隨伴する税役制度をもまた、そのまま繼承したのである。

以上のような周の井田法は、西周の時にどの程度行なわれたものかは不明であるが、この法の後世への影響は極めて大きく、この法を離れては、中國中世の均田的な土地法を論ずることは不可能である。そのことについて、これより論を進めよう。

二 晉の律令の成立とその土地法

中國の律令は元來は法家の手によって作られたものであって、これを刑法的な律と非刑法的な令との二つに大別するのがその特徴とするところである。しかも令よりも律の方が先に成立したのであって、律の形式は、戰國時代の初めの頃に魏の文侯の師の李悝が法經六篇を著わしたことによって、初めて整ったと言われている。律はその後、秦の商鞅や李斯、及び漢初の蕭何などの手によって益々整えられて行つたが、令も既に戰國時代に律令という言葉が生れていたようであるから、この頃に律と共に存在していたものである。しかし後世の令の如く、律の外に存在して非刑法的な法典をなしてはいなかったものであって、律に隨伴する補助的な副法に過ぎず、君主が必要に応じて發布する單行法であり、従つてその内容は刑法的なものもあり、非刑法的なものもあつて一定してはいなかった。その令が後に律と完全に分離して獨立した非刑法的法典となり、更には律令そのものの性格が法家的のものから儒家的のものへと大きく變化するようになったのは、前漢の武帝が儒教を以て國教と定め、儒教以外の諸家の學を擯斥したことによるのである。

武帝が儒教を以て國教と定めたのは、元光元年(前三四)になした董仲舒の「臣愚以爲、諸不_レ在_三六藝之科孔子之術_一」

者、皆絶其道、勿使並進、邪辟之說滅息、然後統紀可一、而法度可明、民知所從矣」という對策を嘉納したことによると言われており、小島祐馬先生は、これについてその著『古代支那研究』に収めている「支那の學問の固定性と漢代以後の社會」において、「儒家の經典は漢の武帝の時代に然りし如く、それ以後に於いても依然として支那社會の政治上の根本法典であつた。すべて國家の制度法規は此の根本法典から流出するのである」と述べられている。

武帝以後の諸王朝・諸國家は、武帝のこの儒教を國是とする方針をいづれも踏襲したが故に、小島先生が言われるように、武帝以後の諸王朝の國家としての制度法規即ち律令は、儒教の經典から流れ出るようになったのである。しからば儒教の經典の中で法典的性質のものは何かと言えば、それは禮類である。禮類の中でも特に周禮が主であり、禮記の王制篇もまた法典的性質を持っている。禮類が法典的性質の經典であるについては、市村瓚次郎博士がその著『東洋史統』巻一の「戰國時代の大勢及びその文化」の所で、「周初の禮は社會の秩序を整へる機關を總稱したもので、その範圍は極めて廣く普通の禮儀は勿論、制度・法律もその中に含まれて居つた」と述べられている。

このように前漢の武帝が儒教を以て國教と定めたことによつて、國家の律令が法家的のものから儒家的のものへと變化するようになったが、この變化は直ちに起つたかと言うに、保守的な古代のことであるから、徐々に變化して行き、また律と令との分離も周禮の篇目の影響などをうけて、これも徐々に行なわれて、律令の儒教化及び律と令との分離化が完全になしとげられたのは、晉の時であつた。その晉の律令の編纂は、晉の武帝の泰始三年（二六七）に終つて、それは翌四年に武帝の制定するところとなつた。そのことは晉書卷三十刑法志に、

凡律令合二千九百二十六條・十二萬六千三百言・六十卷、故事三十卷、泰始三年、事畢表上、（中略）四年正月、大赦天下、乃班新律、

とあるのや、晉書卷三武帝本紀に、

泰始四年春正月景戌、律令成、封爵賜帛、各有差、

とあるによつて判るであらう。この二史料で、刑法志は泰始三年に律令の編纂の仕事は終了を告げ、翌四年正月に新律を發布したと言ひ、武帝本紀はただ泰始四年正月に律令が出來上つたので、編纂關係者に論功行賞があつて、發布のことは述べておらない。これは泰始四年正月には、令も律と共に制定發布されたものと思われる。刑法志には律の發布のみを言つて令のことは何も述べていないのは、刑法志は律のことをのみ取扱うものであるから、令の發布にまでは言及しなかつたのであらう。

晉の律令は上記の刑法志にあるように、二つ合わせて六十卷、即ち六十篇であつたが、この六十篇の中で律は二十篇であり、令は四十篇であつた。この令四十篇の篇目は、大唐六典卷六刑部篇の刑部郎中・員外郎の職掌の所にある李林甫らの註に、

晉命賈充等、撰令四十篇、一戸、二學、三貢士、四官品、五吏員、六俸廩、七服制、八祠、九戶調、十佃、十一復除、十二關市、十三捕亡、十四獄官、十五鞭杖、十六醫藥疾病、十七喪葬、十八雜上、十九雜中、二十雜下、(中略)三十三至三十八皆軍法、三十九・四十皆雜法、

と見えている。この律令の外に、晉書の刑法志には、故事三十卷も造られたとある。この故事とは、大唐六典卷六の同じ刑部郎中・員外郎の職掌にある李林甫らの註に、

蓋編錄當時制勅永爲法則、以爲故事、漢建武有律令故事上中下三篇、皆刑法制度也、晉賈充等撰律令、兼刪定當時制詔之條爲故事三十卷、與律令並行、梁易故事爲梁科三十卷、蔡法度所刪定、陳依梁、後魏以格代科、於麟趾殿刪定、名爲麟趾格、

と説明している如く、後世の格のことである。北魏の時から格と稱せられるようになったのである。更にはまた、この頃既に式も存在した。それは晉書卷二十六食貨志に、

及平吳之後、(中略)又制戶調之式、丁男之戶、歲輸絹三匹・綿三斤、女及次丁男爲戶者、半輸、其諸邊郡或三

分之二、遠者三分之一、夷人輸_三賁布_一、戸一匹、遠者或一丈、

とあって、戸調式の例が載せられていることによって明らかであろう。戸調は令として既に泰始四年（二六八）に制定された泰始令四十篇の第九篇目として存在していたことは、上掲の泰始令の篇目の説明によって知られよう。その戸調令の施行細則としての式が、平_レ吳_レ之後に制定されたと言うのであり、吳を平定したのは太康元年（二八〇）であるから、戸調の本令が制定されてから、十數年後にその施行細則が制定された次第である。このようにして後世の律・令・格・式の四種の法典は、晉の時に既に律・令・故事・式の名稱で出来ていたのである。

この晉の律令の編纂者は賈充や杜預らであるが、杜預が中心であつたようである。杜預は法律家であつたと共に、春秋左氏傳の註も作り、吳を平定する際の將軍でもあり、度支尙書に任ぜられる程の政治家でもあつた。彼は律令を編纂した外に、この律令の註解も作つたのであるが、この註解を武帝に獻げる際の上奏文の一部と思われるものが、我が養老の官位令の集解の或云（或人云うとか、或人）の註釋書とのこと）の中に含まれて残っている。それは

杜預奏事云、古之刑書、銘_三之鼎鐘、鑄_三之金石、斯所以塞_三異端、絕_三異理也、凡令以_三教喻爲_レ宗、律以_三懲正爲_レ本、此二法雖_三前後異_レ時、並以_レ仁爲_レ旨也、

というものである。この杜預の逸文は、中國の全上古三代秦漢三國六朝文の中の全晉文に含まれていないから、我が國にだけ残っている杜預の律令についての大切な逸文である。この杜預の逸文においては、先ず以て刑書が春秋時代に鼎^⑨に鑄つけられたことを言い、次に令は教令法であり律は刑罰法であることを明らかにし、更にそれから「此二法雖_三前後異_レ時」と言つて律と令との成立は同時でなくて時を異にしていたと述べてから、最後に律と令との性格を明かにして「並以_レ仁爲_レ旨也」と述べて結論としている。「並びに仁を以て旨となす」とは、晉の律令は儒教の最高道德であり、儒教の根本原理であるところの仁を本旨として編纂したものであるということであり、これを編纂者の杜預自身が言うのであるから、これほど確かなことはないのである。小島祐馬先生の「中國の國家の制度法規は、儒教の根本法典から流れ出る」との論

斷は、かくて晉の律令に至って、初めて完全に實現を見た次第であるが、律と令との分離もこの時に完全に出來、また令は敎令法即ち非刑罰的な民法法典、律はどこまでも刑法法典と成り終つたのもこの時であるは、これまた杜預の上記の逸文が明らかにするところである。

以上の如き律令についての諸改編は、いずれも晉以後の律令に影響し、晉以後の律令の方針をそのまま踏襲したのである。しからば晉の律令は、何を據り所として改編を行ったかというに、これは儒敎の法典的經書である周禮に據つたものであらう。周禮は天・地・春・夏・秋・冬の六官篇から成り、その中で秋官篇が刑法典である以外の残りの五官篇は、いずれも非刑罰的な民法法典をなし、刑罰と非刑罰とが完全に區別された法典をなしている。儒敎的な律令を編纂するには、當然のこととして周禮に據らなければならないのである。この完全に儒敎的法典となり終つた晉の律令に盛られている土地法は、この律令の性格からしても、儒敎の土地法であるところの井田法に範を採っていたであらうことは、この土地法の内容を究めなくても、十分に想察され得ることである。實際また井田法の原理に従つて、晉の土地法は立てられていたのである。この土地法をこれから説くこととするが、その前に晉書にあるこの土地法に關する文獻の從來の取扱ひ方について、少しく述べて置く必要があるから、それから先ず述べよう。

晉の土地法は泰始四年（二六八）に制定された晉令の第十篇目の佃令に規定されていたことは、十分想像されることである。佃令^⑥は田令の誤りであらうと思われる。また第九篇目の戸調令については、その施行細則たる戸調式が吳を平定した太康元年（二八〇）の後に制定されたのであって、これについては既に述べてある。更にまた第十一篇目の復除令にはおそらく力役制度が規定されていたと思われる。いずれにせよ、晉の土地法は第十篇目の佃令即ち田令に規定さるべきものであり、租税の一種である調を規定した第九篇目の戸調令^⑦や、力役を規定したと思われる第十一篇目の復除令などの扱う事項ではない。言わんや調の施行細則たる戸調式とは全くの無關係であるは、最早や何等の説明も必要としないのである。しかしこれが我が學界では誤られていたのであって、この誤りは三十數年來續いて現在に至り、現在においても誤

っているのである。我が國において、この誤りの先頭に立ったのは仁井田陞氏であらう。それは同氏が昭和八年三月に刊行した『唐令拾遺』田令の第二十二の頁六一三の所に、

晉戸調令 男子一人占田七十畝、女子三十畝、其外丁男課田五十畝、丁女三十畝、次丁男半之、女則不課、(二)

一、晉書卷二十六食貨志・通典卷一食貨一田制上 戸調之式、戸以下四字 據晉志 男子一人占田七十畝、女子三十畝、(以下與

本文同)

ここには「戸調之式」とあるが、晉令の篇目にいふ戸調令であらう。程樹德氏も本文を戸調令の分類に入れて居る。

と述べられている。この一文を読んで誰人も先ず以て直ちに氣づくことは、仁井田氏が令と式との區別、及びその制定年月の相違を全く無視しているということである。即ち仁井田氏は泰始四年(二六八)に制定された戸調令と、吳を平定した太康元年(二八〇)の後に制定された戸調之式とは、同一のものであると言っているのであって、これは式は令の施行細則であるという令と式との法典としての性格の相違も、また兩者の制定年月の相違も、全く無視しての議論である。このようにして仁井田氏は勝手に戸調之式をば戸調令に改め、更にそれから進んでその戸調令に盛られているとして晉の土地法の所謂る占田・課田法を條文化して掲げている。これは晉の佃令即ち田令を無視した議論であって、租税の一種の調を規定した戸調令に、土地法が規定されている筈はないのである。これはこの租税としての戸調が創った三國魏の戸調を見て、また晉の律令を繼承している南北朝・隋・唐の諸律令を見ても判ることである。仁井田氏は以上の如き考えを、中國の法制史を研究し始めた頃から、既に持っていたようである。それは同氏が中國法制史家として最初に發表されたところの國家學會雜誌第四三卷の第十二號(昭和四年十二月發行)に載せた論文「古代支那・日本の土地私有制」(一)の頁三四—三五において、

晉の世祖武帝が吳を亡して間もなく、土地私有の最高限度を規定することとなった。云云。

と述べており、戸調之式が制定された平吳之後の時に、土地法の規定が出来たとしてゐることからしても、そのことが窺えるのである。仁井田氏のこの誤りは、仁井田氏が述べている如く、程樹德氏の『九朝律考』卷下に收められている晉律考卷下に、戸調令として、晉書食貨志の及平_レ吳之後、(中略)又制_二戸調之式_一の一文、即ち

丁男之戸、歲輸_二絹三匹・綿三斤_一、女及次丁男爲_レ戸者、半輸、其諸邊郡或_二三分之一_一、遠者三分之一、夷人輸_二糒布一戸一匹、遠者或一丈、男子一人、占田七十畝、女子三十畝、其外丁男、課田五十畝、丁女二十畝、次丁男半_レ之、女則不課、男女年十六已上至_二六十_一爲_二正丁_一、十五已下至_二十三_一、六十一已上至_二六十五_一爲_二次丁_一、十二已下・六十六已上爲_二老小_一、不_レ事、遠夷不課田者、輸_二義米_一、戸三斛、遠者五斗、極遠者輸_二算錢_一、人二十八文、

を掲げ、末尾に割註として「食貨志引戸調式」と記してゐるのを信じたことに因るのである。程樹德氏はこの一文全部が戸調式であり、それはつまるところ戸調令であるというのであり、これを仁井田氏が信じて上記の如く、戸調式を以て戸調令とし、以て晉の土地法を説くに至つたのである。仁井田氏の外にも、その頃にこのような説明をなす學者が我が國には存在したが、このような學説が非常に我が學界に影響して、現在においても晉の土地法を戸調式で説くのが、學界の常識となつてゐる。私も初めはこのような説を信じて晉の土地法を取扱つていたが、後になつて晉の律令全體を究めるに及んで、それが大なる誤りであることに氣づいた次第である。尾張藩の儒者・奥田永業は、その著の『治具十三條』の卷一田賦考で晉の戸調之式を取扱つてゐるが、それには調のことだけを記載し、土地や力役のことは記載しておらない。

上掲の所謂の晉書食貨志の戸調之式の一文は、初めに戸調式を言い、次に佃令即ち田令の土地法が述べられ、次に戸令の正丁・次丁・老小制度が述べられて、最後に復除令による力役制度が述べられてゐるようであつて、これ等の諸令を適當に混えて一文としてゐるのである。従つて「及平_レ吳之後」といふのは戸調式を制定した年時であつて、この同じ年に土地法等が施行されたといふのは、これは晉書食貨志を讀み誤つたものである。土地法即ち佃令(田令)についても、施行細則の佃式(田式)が制定されたものか否かは不明である。ここで判るのは、戸調令の施行細則たる戸調式が、平吳

の後に制定されたということだけである。従つて土地法は、戸調式から切り離して論ずべきものである。その土地法は、既に掲げてある如く、

男子一人、占田七十畝、女子三十畝、其外丁男、課田五十畝、丁女二十畝、次丁男半之、女則不課、

というものであつて、我々がいう占田・課田法である。晉の律令は、既に紹介してある如く、儒教の本旨に則して編纂されたものであるから、その土地法も、儒教の土地法である井田法に準據しているは、最早や何等の説明も必要としないのである。井田法においては、室ある丁男、即ち一夫婦に百畝の私田が與えられる、その外に同居の丁男があれば、それは餘夫として、それにも一夫婦の私田百畝よりは少ない面積の私田が與えられるが、この土地の班給に預かつた民衆の公家に對する反對給付の絶對的のものは何かと言へば、それは力役であつた。従つて力役を負擔する義務の無い婦女子は、土地の班給にも預からないとされていた。以上が井田法の骨子であるが、晉の土地法は、この井田法の原則に従っているのである。ただ異なるところは、女にも土地をあからさまに班給したことである。井田法でも室ある丁男に與えられる私田百畝の中には、潜在的に妻の取得分が含まれているは論を俟たないことであるが、晉の土地法では、それを表面に出して「男子一人、占田七十畝、女子三十畝」と定めて、私田百畝をば、夫は七十畝、妻は三十畝と區分したまでである。井田法の室ある者に與えられる私田百畝を、後世では占田とも言つた例は、唐の陸贄の陸宣公奏議（四部叢刊本）卷六、均節賦稅一恤百姓二六條の第六論兼并之家私斂重於公稅二に、

夫物之不可掩藏而易以閱視者、莫著乎田宅、臣請又措其宅而勿議、且舉占田一事以言之、古先哲王、彊理天下、百畝之地、號曰一夫、蓋以一夫受一畝、不使得過於百畝也、欲使一人無廢業、田無曠耕、人力田疇二者適足、

とあるによつて判るであらう。室即ち戸を構えている一夫婦が占有する土地であるから、占田ともいふのであらう。井田法の餘夫に當る同居の丁男には、戸主たる丁男よりは少い面積の課田五十畝が與えられるが、妻たる丁女に土地が與えら

れるから、同居の丁女にも、同居の丁男と同様に課田二十畝が與えられる。更には次丁男と稱する十三歳から十五歳までの男子と、六十一歳から六十五歳までの男子にも課田二十五畝が與えられる。これを何故に課田と稱するかというに、給田に對する反對給付の絶對的のものは力役であり、戸を構えていない故に、占田の如く戸調の義務がないから、力役の義務のある田、即ち課田と稱するのである。また女でも妻たる丁女は占田三十畝、同居の丁女は課田二十畝の田が班給されるので、給田に對する反對給付の力役に従わなければならないが、女には力役を科してはならない鐵則があるので、ここにこの土地法の末尾に、「女則不課」という但し書がつけられているのである。これは女にも土地を班給するが、しかし力役の義務は免除するというものである。

課田と言ひ、女則不課と言ふところの課は、課役の略であつて、課田は課役田、不課は不課役のことに他ならない。更にまた女則不課は、女則不課役であり、それは女則不課役口のことであつて、女は不課口であるということである。これは後の制度にも、例えば魏書卷百十食貨志に、

諸民年及課、則受_レ田、老免_レ(課)及身沒、則還_レ田、

とあり、及_レ課とは課役を負擔する年齢に達すればということであり、また舊唐書卷九玄宗本紀天寶十三載の終りの所に、其載戸部計今年見管州縣戸口、(中略)戸九百六十一萬九千二百五十四、三百八十八萬六千五百四不課、五百三十萬一千四十四課、口五千二百八十八萬四百八十八、四千五百二十一萬八千四百八十不課、七百六十六萬二千八百課、とあり、課役を負擔する課口・課戸と、課役を負擔しない不課口・不課戸のことを、單に課と不課で表わしているのであり、また新唐書卷五十一食貨志に、

凡主戸內有三課口者爲三課戸、若_二老及男廢疾・篤疾・寡妻妾・部曲・客女・奴婢及視九品以上官_一不課、

とあり、寡妻妾は田令に田三十畝を班給されることになっているが、課役を免じて不課口にするというものであり、我が養老の戸令の戸主の條文の本註にも、

不課、謂、皇親及八位以上、男年十六以下、并蔭子・耆・癡疾・篤疾・妻妾・女・家人・奴婢、

とあって、不課口をば不課の文字で表わしている。このようにして課は課役の略であり、不課は不課役の略と見做してもその課役が力役を意味することを次に説明しなければならぬ。

課役の語は既に後漢書卷六十二の樊宏傳に、「課役童隸、各得_二其宜_一」とあって、使役の意味に用いられているが、その後においても、同様であって、隋書卷二十四食貨志に、

晉自_二中原喪亂_一、元帝寓_二居江左_一、百姓自拔南奔者、並謂_二之僑人_一、(中略)都下人、多爲_二諸王公・貴人左右佃客・典計・衣食客之類_一、皆無課役、官品第一・第二、佃客無_二過四十戶_一、(中略)官品第六已上、并得_二衣食客三人_一、第七・第八二人、第九及(中略)持_二鉞冗從武賁・命中武賁・武騎一人_一、客皆注_レ家、籍_二其課_一、

とあり、晉の時には、王公貴族には佃客・衣食客と稱せられる所謂の蔭附戸が與えられたが、これ等は「皆無課役」とある如く、國家の課役はなかったが、しかし「客皆注_レ家、籍_二其課_一」とある如く、彼等は王公貴族の家に隸入されて、その課役を提供する義務を負わされたとあるが、この制度は晉の前の三國魏の時に既に行なわれていたのであって、晉書卷九十三外戚傳の王恂傳に、

魏氏給_二公卿已下租牛・客戶・數各有_レ差、自後小人憚_レ役、多樂爲_レ之、貴勢之門、動有_二百數_一、又太原諸部、亦以_二匈奴人爲_二田客_一、多者數千、

と見えている。魏氏即ち三國魏の時に、公卿貴族は客戶即ち衣食客や田客を持って居り、「小人の役を憚る者は、多く樂しんでこれになった」というが、これは國家の力役が無いことを意味するのであり、前掲の隋書食貨志の「皆無課役」に相應するものである。

國家の力役は免除されるが、その隸屬させられている主家に對しては、勞働奉仕の義務を負う所謂の蔭附戸の制度は、既に先秦の時に行なわれていたのであって、周末の書である韓非子の五蠹篇に、

窮危之所_レ在也、民安_{いづくんぞ}得_レ勿_レ避難、故事_{こと}私門_{しきん}而完_を解舍_{かいしゃ}、解舍完則遠_{とほ}戰、遠_{とほ}戰則安、

とあり、この「事_{こと}私門_{しきん}而完_を解舍_{かいしゃ}」ということは、王公權貴に蔭附して、その庇護によって公の力役の義務を免れるとすることである。解舍とは、周禮などという施舍と同じであって、力役免除のことであり、太田方の韓非子翼義には、「解舍、謂_を免_を徭役_{せうえき}也」と説明している。儒家は施舍と言ひ、法家は解舍と言ひが、いずれも力役免除のことである。韓非子の「事_{こと}私門_{しきん}而完_を解舍_{かいしゃ}」ということ、魏・晉が行なつたまでであり、その後においても、魏書卷百十食貨志に、

魏初不_レ立_二三長_一、故民多蔭附、蔭附者、皆無_二官役_一、豪彊徵斂、倍_二於公賦_一、

とある如く、北魏でもこれは行なわれていた。北魏以後にも行なわれた。しかもこの魏書の「皆無_二官役_一」は、曩の隋書食貨志の「皆無_二課役_一」に相當することは、少しの説明も必要としないのであつて、課役は官役のことであることを表わしている。

このようにして課役は力役の意味であることが判れば、課田や女則不課は力役を以て説明すべきことが判り、更には儒教の本旨に準據して作られた晉の田令の所謂る占田・課田法は、全く儒教の土地法である井田法に則していることが判るのである。これは單に土地法だけでなく、土地法と相表裏をなす税役法においても同様である。井田法の税役は既に述べである如く、布縷之征・粟米之征・力役之征の三種である。布縷之征は、室即ち戸に對する税で、その品物は布縷であるが、晉では戸調の名において絹・綿が戸に課せられた。次に粟米之征は班給された土地に對する租であるが、晉でも晉故事に「凡民丁課田、夫五十畝、收租四斛・絹三匹・綿三斤」とある如く、班給した課田から租を收めている事實からしても租のあったことが判るのである。最後に力役之征は、これは文字通り人を對象に科せられる徭役であるが、晉にも力役のあったことは、課田や女則不課に現われている外に、既に掲げてある晉書食貨志に、「十二已下・六十六已上爲_二老小_一、不_レ事_{こと}」とあるのは、十二歳以下の小丁、及び六十六歳以上の老丁には力役は科せず、それ以外の十六歳以上六十歳までの正丁、及び十三歳から十五歳までと六十一歳から六十五歳までの次丁には、力役を科するということを示している。

のである。それは不_レ事_トの文字が説明している。不_レ事とは、漢書卷一下高祖七年正月の條に「民產_レ子、復勿_レ事二歲」の勿_レ事に對して、唐の顏師古は「勿_レ事、不_レ役使_二也」と註し、また管子の入國篇に「三年然後事_ト之_ヲ」とある事に對して、唐の房玄齡は「事、謂_二供_レ國之職役_二也」と註し、また周禮地官司徒篇の鄉師の職掌に「凡邦事、令_レ作_二秩敘_二」とある事に對して、鄭玄は「事、功力之事」と註し、更にまた禮記の王制篇に「興_レ事任_レ力」とある事に對して、鄭玄は「事、謂_二築_二邑廬宿市_二也」と註している。このように事とは力役のことであり、從つて勿_レ事とか不_レ事ということは、力役を科さないということである。我が堀川學派の伊藤長胤（東涯）も、その著の『制度通』の第九成丁ノ事の項に、

晉ノ時男女年十六已上六十一マテヲ正丁トス、十五已下十三マテト六十一已上六十五マテヲ次丁トス、十二以下六十以上ヲ老小トテ役ヲユルス、其ノ後宋齊以下マテノ法、亦コレニ準ス、

と述べて、不_レ事をば「役ヲユルス」と書き改めて、不_レ事が力役免除のことであることを明らかにしている。また奥田永業もその著『治具十三條』の第三戸口考で晉のこの力役制度を取扱い、「（上略）十二以下六十六以上を老小となして、諸役を免ず」と述べ、長胤と同様に、不_レ事は諸役免除のことであるとしている。このように不_レ事が力役免除のことであるのが判れば、不_レ事に預かる老小以外の正丁及び次丁には、力役が及ぶものであるは、最早や説明を要しないことである。

私は既に昭和二八年に出版した拙著の『均田法とその税役制度』などで、晉の占田・課田法は井田法の精神をうけたものであり、後の均田法の母體をなすものであることを主張したが、その後の新たな史料の發見等によつても、自説の正しさを益々信ずるようになったと共に、舊説を補訂する必要をも感じたので、以上の如く改めて晉の占田・課田法を論じたのである。學界各位にこの際望むところは、速かに戸調式によつて占田・課田法を取扱うことはやめにして、晉律令の編纂者たる杜預の「晉の律令は、並びに仁を以て本旨としている」という立法精神をよく會得されてから、冷靜な態度で晉書食貨志にある晉の土地法を手がけて戴きたいということである。

三 均田法とその名稱及び性格

井田法に則した土地法の占田・課田法を創めた晉は、四十年程を経て外民族の壓迫を避けて東南に遷って東晉となり、華北の地は外民族の五胡の蹂躪するところとなったが、やがて鮮卑族の北魏が統一して北朝を形成するようになり、東南の地では宋が東晉に替って南朝の最初の王朝をなすようになった。このようなことで、晉の占田・課田法が實施された期間はありません。いつとはなく行なわれなくなったが、これを北魏の孝文帝が再興した。これが世に言う均田法である。孝文帝は中國の文化を慕い、同胞の鮮卑族に對して華化政策を強力に推し進めたと共に、儒教的な諸制度を打ち立てた君主であることは、人のよく知るところであるが、均田法もまた彼の中華化した君主としての政策の一環として行なつたに過ぎないのである。均田法は太和九年(四八五)に發布されたが、この法を作った直接の動機は、李安世の上言にあった。李安世の上言は、魏書卷五十三の李孝伯傳に含まれている彼の傳に見えているが、それは彼が主客給事中に任ぜられた時に、「民困飢流散、豪右多有_レ占奪」の弊あるに氣づいて、その弊の匡正を要望して行なわれたものである。この上言は長文をなしているが、要するにその骨子は、「今雖_二桑井難_レ復_一、宜_レ更均量、審_二其徑術_一、令_レ分藝有_レ準、力業相稱、細民獲_二資生之利_一、豪右靡_二餘地之盈_一、則無_レ私之澤、乃播_二均於兆庶_一、云云」と言うにあつて、土地の均分を求めたものである。この上言を要約したものが、資治通鑑卷百三十六齊紀世祖武帝永明三年(北魏太和九年西曆四八五年)の所にも載せられているが、その「雖_二桑井難_レ復_一」とある桑井に對して、元人・胡三省は、

桑井、謂_二古者井田之制、五畝之宅、樹_二牆下_一以_二桑也_一、

と註している。しかればこの桑井とは井田法のことを言っているのであつて、井田法を今復活せしめることは困難ではあるが、その主旨に沿うて土地の均分を行えと、李安世の上言は要望したものである。彼はこの上言の初めの所でも、「臣聞、量_二地畫_レ野、經_二國大式_一、邑地相參、致_二治之本_一、井稅之興、其來日久、田萊之數、制_二之以_レ限、蓋欲_二使_レ土不_レ曠_一、功

民罔_レ游_レ力、雄擅之家、不_レ獨膏腴之美、單陋之夫、亦有頃畝之分」と言つて、井田法を謳歌しているのである。この井田法のような土地の均分政策を實行せよと主張した彼の上言に對して、高祖孝文帝は、李安世の傳によると、

高祖深納_レ之、後均田之制、起_ニ於此_一矣、

とあつて、深くこれを嘉納したが、これによつて均田法が生まれるようになったとある。この高祖孝文帝が太和九年に發布した均田法なるものの内容は、魏書卷百十の食貨志に載せられてあり、私も拙著『均田法とその稅役制度』の中に解説してあるが、この法の大綱は、男夫の年十五以上のものは露田四十畝、その婦人は二十畝、合計して一夫婦で六十畝が支給されるものであつて、これは井田法の私田百畝に比當されて穀類が栽培される所であり、當時の耕作方法は連作は行なわれず、一年休耕とか二年休耕の方法であつたから、露田は二倍乃至は三倍の面積が實際は支給されることになつてゐた。この露田は後の口分田に當るものである。この露田の外に戸をなすべき男夫には桑田二十畝が支給された。これは後の世業田（永業田）に當るものであり、桑・榆・棗などの樹木を植える所であるからして、井田法の宅地の系統に屬するものである。更にまた家を建てる所として、宅地が良人は三口につき一畝、奴婢は五口について一畝の割合いで與えられ、また野菜を作るために一口につき五分の一畝あての園地も與えられることになつてゐた。この宅地と園地は後の均田法にも園宅地として存在した。井田法の五畝の宅地は、北魏の桑田と宅地と園地とを合せたものに當るものである。このようにして後の唐などの均田法の口分田・世業田（永業田）・園宅地の區別制度は、北魏の時に露田・桑田・宅地・園地の形式で出來上つていたのである。

以上のような内容をなす北魏の均田法は、北魏自身でこれを均田法と呼んだであらうか。北魏の當事者自身がこの土地法を均田法と呼んだという證據は、私はどこにも發見することが出來ないのである。これは魏書卷七上の高祖孝文帝本紀上の太和九年十月丁未の條にある孝文帝が均田法を發布するに當つての詔に、

今遣_ニ使者_一循_ニ行州郡_一、與_ニ牧守_一均_ニ給天下之田_一、還受以_ニ生死_一爲_レ斷、

とあるその「均給天下之田」というところから、民間の俗稱としてこの名が生れ出たのではなからうか。

北魏は後に東西の兩魏に分れ、西魏からは更に北周が生れ、また東魏からは北齊が生れたが、いずれも均田的な土地法を實施した。この兩王朝の土地法については、拙著『均田法とその稅役制度』に述べてあるが、北齊の均田法については別に文化第二七卷第三號所載の拙稿「北齊の均田法——西嶋定生氏の駁論に答う——」にも詳述してある。先ず西魏・北周のものから、その大綱を紹介しよう。西魏の權臣であり北周の始祖である宇文泰は、周の制度を慕って周禮學者の蘇綽・盧辯を重用し、周禮を直譯したような制度をつくって西魏及び北周に實施した。そのことは周書の太祖文帝(宇文泰)本紀・蘇綽傳・盧辯傳や隋書の諸志類に見えている。その土地法は隋書卷二十四食貨志に、

後周太祖作相、創制六官、載師掌_二任_レ土之法、辨_二夫家田里之數_一、(中略)司均掌_二田里之政令_一、凡人口十已上、宅五畝、口九已上、宅四畝、五口已下、宅二畝、有_レ室者、田百四十畝、丁者田百畝、

とある。土地法を掌る官には、載師及び司均があつたが、これ等はいずれも周禮^⑤に同名及び類似の官があり、その職掌も同様なものであつたが、土地制度そのものも井田法に頗る似ている。即ち土地は井田法の分類に従つて、田即ち私田と宅地の二種類とし、妻を娶っている丁男は、井田法の稱呼と同様に有_レ室者^⑥と言ひ、私田及び宅地の面積も、井田法の五畝之宅・百畝之田に準じて少しく幅を設けたものである。この西魏・北周の土地法は、自からは何んと稱したかは不明である。しかし周禮に全面的に則して立てられた制度であるから、井田法と呼んでいたのではなからうか。

次は北齊の土地法である。北齊の土地法は河清三年(五六四)の律令制定によつて、初めて施かれたものであつて、その内容はやはり隋書卷二十四の食貨志に見えている。それは

京城四面諸坊之外、三十里内爲_二公田_一、受_二公田_一者、三縣代遷内(戶)執事官一品已下、逮_二羽林武賁_一、各有_レ差、其外畿郡、華人官第一品已下、羽林武賁已上、各有_レ差、職事及百姓請_二墾田_一者、名爲_二永田_一、奴婢受田者、親王止_二三百人_一、嗣王止_二二百人_一、第二品嗣王已下及庶姓王、止_二一百五十人_一、正三品已上及皇宗、止_二一百人_一、七品已上、限

止^三八十人、八品已下至庶人、限止^三六十人、奴婢限外不^レ給^二田者、皆不^レ輸、其方百里外及州人、一夫受^二露田八十畝、婦四十畝、奴婢依^二良人、限數與^二在京百官同、丁牛一頭、受田六十畝、限止^三四年(牛)、又每^レ丁給^二永業二十畝、爲^二桑田、其中種^二桑五十根・榆三根・棗五根、不^レ在^二還受之限、非^二此田者、悉入^二還受之分、不^レ宜^二桑者、給^二麻田如^二桑田法、

というものである。この北齊の土地法の一文を読んで直ちに判ることは、北齊の首都の鄴を中心として、そこから四方へ各三十里の間と、その外側の三十一里から百里までの間と、更にその外側の國內全域に互る間の三地域に分けて授田しているということであって、これは既に本論文の第一節「井田法の概要」の所に紹介してあるように、井田法では天子の直轄地方千里は、首都を中心として四方へ百里までの郊の地と、その外側の五百里までの野とに大別して、その郊と野とは異なつた井田法を實施し、更に郊をば五十里を境として近郊と遠郊とに分けるといふその井田法の形式を踏襲していることがうかがわれるのである。これはまた禮記の王制篇に、

天子百里之内、以^レ共^二官、千里之内、以^レ爲^二御、

とあり、天下の直轄地方千里の中で、首都から四方百里までの間の土地からの田租は、官府の費に當て、それから外の残りの方千里の土地からの田租は、天子の服御飲食の費に當てるとあつて、土地から得る稅收の支途を、百里を以て區別しているのにも相通ずるものである。北齊の土地法では、百里を以て境とし、百里内の土地は官員軍人を中心にして班給され、百里から外の土地は一般人に班給されているが、その百里の内も三十里を以て更に區切り、三十里内の土地は鮮卑人出身のもの、即ち日本流に言えば旗本御家人に與え、三十一里から百里までの土地は漢人出身のものに與えるのであつた。井田法では、百里内の郊の地に公田の無い形式の土地が班給されるのは、これは中央政府の官員達がその班給に預かるのであり、彼等は公務が忙しくて公田を共同耕作する義務を果すことが出来ないから公田のない私田のみが與えられるのであるが、北齊の土地法においても、百里内は主として官員軍人達に與えられるようになっていた。その百里の外で行

なわれる一般人に對する土地法は、北魏の制度に従つて、夫には露田八十畝、その妻には四十畝が與えられ、また桑田は戸をなす丁男に二十畝が與えられることになつてゐた。その外に、宅地や園地も與えられることになつてゐたのではないかと思われるが、史にはそのことは見えない。

以上のような内容をなす北齊の土地法は、西魏・北周ほどではないが、北魏以上に井田法に近いものであつた。これは北齊の律令は、刁柔の如き禮經専門家がその編纂に當つたが故ではなからうか。そのことは拙稿「北齊の均田法——西嶋定生氏の駁論に答う——」に述べてある。この北齊の土地法を當時何んと稱したかは不明である。しかし均田法とは言つていなかったのである。それは隋書卷二百七官志にある北齊の職官の所に、土地制度の運営に當る度支尚書の配下の右戸について、

右戸掌天下公私田宅租調等事、

とあつて、單に公私田宅を掌ると言つて、均田を掌ると言っていないことからしても判るであらう。均田とは言わず、むしろ井田と言つてゐたのではないかと想像される。

北朝の北周は西曆五七七年に北齊を滅して、その地を合わせ有するようになったが、その北周も間もなく西曆五八一年に外戚の楊堅に滅されて、楊堅は隋を興した。これが隋の高祖文帝である。文帝は西曆五八九年に南朝の陳を平げて、中國統一の業をなし遂げた。この隋は北周から出た王朝ではあるが、北周の制度にはあまり従わないうで、北齊の制度を多く採用した。これは北周の制度があまりにも周禮に依存し過ぎて現實的でなかつたので、現實的な北齊の制度を採るようになったのであらう。その土地法も北齊のものを採用したのであつて、隋書卷二十四の食貨志には、隋の土地法を敍して、

其丁男・中男・永業・露田、皆遵後齊（北齊）之制、並課樹以桑・榆及棗、其園宅、率三口給一畝、奴婢則五口給一畝、

とあり、丁男・中男に露田と永業田を班給する制度は、後齊即ち北齊の制度に遵つた事實を述べてゐる。また園宅地の班

給制度も述べている。この隋の土地法は、隋では何んと稱したかは不明である。北齊の制度を遵守したのであるから、或いは井田法と稱したのでないかとも想像されるが、確かなことは不明である。ただ資治通鑑卷百七十八隋紀の高祖文帝開皇十二年十二月の條に、

時天下戶口歲增、京輔及三河、地少而人衆、衣食不_レ給、帝乃發_レ使四出、均_三天下之田_一、其狹鄉、每丁纔至二十畝、老小又少焉、

とあり、これには「均_三天下之田_一」と述べられていて、あたかも均田法が行なわれた如くに感ぜられるが、これは班田が不均衡になって來たから、均平にするとのことであつて、均田法という土地法を實施したということではない。同様なことが資治通鑑卷百八十一隋紀の煬帝大業五年正月癸未の條にも、

詔_三天下_二均_レ田_一、

と見えている。

隋に替つたのは唐である。唐は律令が完成された時であり、従つて均田法も完成された時である。唐の時には令は高祖の武徳七年、太宗の貞觀十一年、高宗の永徽二年、玄宗の開元三年、開元七年、開元二十五年に各改訂編纂されたのであるが、均田法はその田令に規定されていたのである。その一例として通典卷二食貨篇田制下に載せられているところの開元二十五年のものを掲げるならば、

丁男給_三永業田二十畝・口分田八十畝_一、其中男年十八以上、亦依_三丁男_二給、老男・篤疾・癯疾各給口分田四十畝、寡妻妾各給口分田三十畝、先永業者、通充口分之數、黃小・中丁男子及・寡妻妾當_レ戶者、各給_三永業田二十畝・口分田二十畝_一、應_レ給_三寬鄉_一、並依_三所_レ定數_一、若狹鄉所受者、減_三寬鄉口分之半_一、其給_三口分田_二者、易田則倍給、

とあり、丁男及び中男の年十八以上のものには、百畝の田を班給し、その百畝の中で二十畝は永業田、八十畝は口分田とするというものである。これまでのものと異なるのは、妻には班給しないという點にある。永業田には、これまでのもの

と同様に桑・楡・棗を植えることになっていたが、この永業田・口分田とは別に、園宅地も與えられた。それは通典の同所に、

應給園宅地二者、良口三口以下、給一畝、每三口加一畝、賤口五口給一畝、每五口加一畝、並不入永業・口分之限、其京城及州郡縣郭下園宅、不在此例、

と見えている。唐では開元二十五年以後は、律令の編纂を行なわなかった。従つて開元二十五年（七三七）の令は、唐朝の令としては最後のものであり、また均田法が規定されている令の最後のものでもある。何故ならば、當時は均田法が行なわれていたからである。開元二十五年の律令の編纂者は、中書令の李林甫や侍中の牛仙客らであるが、李林甫らは同年に唐律疏議も編纂したのであり、また翌開元二十六年には、玄宗の御撰である大唐六典にも註をほどこして、これを完成したのである。大唐六典は周禮の大官篇に擬して、律令を巧みに織りまぜて作られたものである。このようにして大唐六典は、唐朝の最後の律令を作った人によってその編纂が完成され、その註までがほどこされたのである。この書の編纂註釋者である李林甫は、當時は宰相の任に在ったから、この六典に盛られている諸制度の實施にも自から當っていたわけである。所謂の均田法は、この六典の卷三戸部篇に詳しく載せられている。ところが、この六典では、萬人が等しく稱している均田法と言われる土地法をば、均田法とは呼んでいないのである。井田法と稱しているのである。それは同書卷三戸部篇に、

戸部尚書・侍郎之職、掌天下戸口・井田之政令、

とある。尚書省の六部の一つである戸部は、天下の土地や戸口や賦税などを管掌する官廳であり、その長官は戸部尚書、次官は戸部侍郎であり、その下の局長や課長に當る官に戸部郎中や戸部員外郎などがあつた。この長官たる戸部尚書や次官たる戸部侍郎の職務の一つは、天下の井田の政令を掌ることであると言ひ、均田の政令を掌るとは申していないのである。このようなことは、舊唐書卷四十三職官志の戸部尚書の所にも、

(戸部)郎中・(戸部)員外(郎)之職、掌分理戸口・井田之事、とあって、舊唐書もやはり井田と言い、均田とは言っていないのである。

唐の所謂る均田法が、均田法の名において實施されていたのであれば、この所謂る均田法が實施されていた時の天子の御撰の書であり、時の宰相がその編纂に當り、註釋まで書いた法典である大唐六典には、必ずや均田と書かれてある筈である。それが井田と書かれているのは、唐の兩稅法實施以前に行なわれていた土地法の公の名稱は、均田法ではなくて井田法であったことを、雄辯に物語っているものである。また舊唐書は、内藤虎次郎先生の著『支那史學史』の第九章「宋代に於ける史學の進展」の新・舊唐書の比較の所には、

舊唐書は主にも實錄等に出ていることで、官邊の材料の正確なものを取ったのに對し、新唐書は多く小説——これは假作のものではない、逸事・評判記の類で、責任なき著述を指す。——を材料とした。

と述べられてあるように、官邊の記録を主として舊唐書は編纂されたのであって、その史料の取扱いは大唐六典と同じ傾向のものであるが、その官邊の正確な史料によつて書かれたという舊唐書に井田と記されているのは、これまた唐の均田法と言われるものの公の名稱は、井田法であったことを立證しているのである。この唐の井田法の公稱で呼ばれる土地法は唐の時に突如として出現したのではなくて、これを段々と溯れば周禮の井田法に到達するのである。そのことは既に本論文でこれまで私がたどつて來たところである。北魏から唐までの土地法は均田法の名稱で一般に呼ばれているが、この名稱を公稱として用いた史料は私は未だ見たことがなく、均田法と言うのは、どこまでも俗稱であり、公稱ではなかったようである。公稱は井田法であつたのであり、少なくとも唐では井田法であつたのである。名稱が井田法であつたばかりでなく、その内容實態もまた井田法に準據していたことは、これまたこれまで私が本論文で説いて來た事柄によつて判るであらう。このことは既に唐人・陸贄が述べているのである。それは彼の陸宣公奏議卷六(四部叢刊本)の均節賦稅「恤百姓」六條の第一條「論兩稅之弊須有三釐革」に、

古者、一井之地、九夫共之、公田在中、籍而不税、私田不_レ善則非吏、公田不_レ善則非民、事頗纖微、難_ニ於防檢、春秋之際、已不能_レ行、故國家襲_ニ其要而去_ニ其煩、丁男一人、授田百畝、但歲納_ニ租粟二石而已、(下略)

と述べてあり、唐の土地法は、井田法の要を襲い煩を去って造られたものであると説明している。このようなことは、また加藤繁博士もその著『支那古田制の研究』の中で、隨所に井田法と後世の均田法とを比較して、均田法が井田法の影響を受けている事實を指摘しておられるが、加藤博士はこの書の中で均田法の文字を使用するに當ては、その最初のものには、

後世即ち後魏・北齊・後周・隋・唐の諸朝で、土地公有制を復興した時の制度即ち所謂均田法、云云。(京都法學會發行)の本来は頁三とあるように、所謂の文字を頭に冠している。これは加藤博士も均田法という名稱は公のものではなく、俗稱に過ぎないというようなことに、何か氣づかれていたのではなからうか。

四 結 語

以上の如く、私は中國中世の土地法である均田法なるものの名稱及び實態を調べて來た。この土地法は中國だけのものではなく、日本を始めとする東亞の諸國に傳播してその國々の土地法となったものであって、世界的な性質を持つ重要な土地法であつた。この土地法は本論文で論じてある如く、古代の井田法とは、その名稱までが同一であるように、まったく井田法の後身に過ぎないのである。その井田法は儒家の土地法であつて、法家の土地法ではない。法家の土地法は商鞅の政策を見て判る如く、井田法とは全く反對の均一主義を打破する土地法である。法家の法治主義を採用した秦では、この儒家の井田法が行なわれる筈はなく、前漢の初めの頃はまだ秦の律令を繼承して實施していたから、秦と同様であつたが、既に述べてある如く、前漢の武帝が儒家を國教と定めたことによつて、ここに小島祐馬先生が言われるように、「すべて國家の制度法規は儒家の經典から流出するようになった」のである。この儒家の經典に盛られている土地法は何かと

言え、それは井田法であるを以て、儒教的に編纂された晉の律令の土地法である所謂の占田・課田法が、土地の公有にかかる井田法の原則に従っているのは當然のことであり、その後の所謂の均田法もまた同様である。井田法の制度を最も詳しく記載しているのは周禮であり、従つて占田・課田法や均田法を研究することだけを以てしても、先ず以て周禮を究める必要があるが、周禮は單に土地法だけでなく、後世の律令が取扱っている事項は、悉くこの書が取扱っているを以て律令學の研究は先ず以て周禮から始めることが必要なのである。これは私が初めて唱えるものではなく、小島先生が既に言っていることであり、小島先生とは單に言葉の表現が異なるだけであるが、小島先生の師であり京都の中國學の創始者の一人である狩野直喜先生が早くから、このような見解を述べられていた。狩野先生は明治三十六年から十年間、臨時臺灣舊慣調査會に關係され、清國行政法の編纂に従われたが、その際に得られた體驗は「清朝の諸制度でも段々と溯つて行けば、遂には周禮に到達する」ということであつて、私はこのことを昭和四年頃に先生から直接聴かされたと共に、「中國の法制經濟史を修めるのであれば、必ず先ず周禮を讀むように」ということも教えられたのである。狩野先生がこのような考えであられたから、先生が織田萬博士と共に編纂の責任に當たられた清國行政法が、周禮等に制度の起源を求めているのは論を俟たないことであるが、この編纂の協力者の一人であつた加藤博士が、その支那古田制の研究を完成されたのもこの時代のことであつて、この書で加藤博士が周の井田法が後世の所謂の均田法に大きな影響を與えていた事實を指摘しているのも、その所以がよく窺い知られるのである。加藤博士の外に、東川徳治氏もまた協力者の一人であつたが、同氏も常に周禮を重んぜられていて、晩年には周禮の講義録の發行をさえ企てられていた。狩野先生を始めとするこれ等一連の學者達が中國の諸制度即ち律令の研究に周禮を重んぜられたことは、全く正しいのであつて、均田法の正しい名稱は井田法であるというこの一事を以てしても、如何に周禮が律令の研究に大切であるかが判るであらう。周禮を離れては律令の重要な部分をなす土地法を正しく理解することは不可能であらう。近時我が學界においては、均田法の研究が盛んなやうであるが、私はここで均田法の研究各位に、狩野先生の教えである「先ず周禮を修めよ」という言葉を、十分玩

味するよう切に望んでやまないものである。

註

- ① 山堂考索のこの圖解と同様な圖解が、欽定周官義疏卷四十禮器圖や欽定禮記義疏卷七十八禮器圖にも載せられている。
- ② 餘夫のことは、加藤繁博士著『支那古田制の研究』頁三一二五、及び頁二四六にも取扱われており、餘夫に對する授田は二十五畝であつたと述べられている。
- ③ この詩經の瞻卬の詩は、白楊社版『支那政治史』上卷に收められている那波利貞博士執筆の「隋唐五代政治史」の中に引用されているので、私は知り得た。
- ④ 福井重雅氏は、史學雜誌第七六編第一號に載せた論文「儒教成立史上の二三の問題」において、前漢の武帝が董仲舒の對策を納れて儒教を以て國教と定めた事實を否定されているが、儒教が武帝の時から隆盛になったことは認めている。
- ⑤ 我が法制史學界の耆宿・中田薫先生も、その法制史研究第三冊に載せられた論文「律令法系の發達についての補考」において、律と令との完全な分離は、晉の律令からであると述べられている。
- ⑥ 隋書卷三十三經籍志には、晉故事四十三卷として見えている。
- ⑦ 刑書を鼎に鑄つけたことについては、拙著『日中律令論』に説明してある。
- ⑧ 佃の文字は一般に小作を意味するものとして知られているが
- ⑨ 戸調はその名が示す如く、戸を客體とする公課であつて、この税は三國魏の曹操の頃から始められたものであり、魏志卷一建安九年九月の條の裴松之の註に引ける王沈の魏書に、「其收田租、畝四升、戸出絹二匹・綿一斤」而已、他不_レ得_二擅與發_一と見え、その卷二三趙儼傳には、この絹綿を以て戸調と稱している。この戸調は井田法の布縵之征と全く同じ税法であるを以て、井田法を復活した晉の占田・課田法においても、そのままの税金税法で公課の一つとしたもののようである。
- ⑩ 現代の高等學校で用いられている日本史及び世界史の教科書には、大抵律令格式のことは記載されており、しかもその式については、律令の施行細則であるという説明が、どこの學校でも生徒に對してなされているようである。それは高等學校の現場の先生達によつて編纂された『日本史用語集』『世界史用語集』（いずれも山川出版社から發行）には、どれもそのように説明されていることによつて知ることが出来る。従つて現代の高校教育をうけた人々は、式は律令の施行細則であるということとを大抵知っているであらう。
- ⑪ 仁井田氏は晩年に至るまで、この誤りには氣づかなかつたようである。その證據には、昭和三九年に『唐令拾遺』を重刊し

ているが、それにはこのことは訂正しておらないのであり、また國家學會雜誌に掲載した論文「古代支那・日本の土地私有制」も、そのままのものを昭和三五年に刊行した同氏の論文集『中國法制史研究』^{取引法}に収めているのである。

⑫ 次丁男と稱する律令語は、晉以後の中國の律令には現われて來ないが、我が律令には現われて來るのである。即ち養老の戸令の老殘の條文には、「凡老殘、並爲_三次丁」とあり、六十一歳から六十五歳に至る老男と、少しく身體に障害のある殘疾者とを以て、次丁即ち次丁男とすると定めている。この次丁男の一事を以てしても、我が律令は唐の律令のみを繼承したものでないことが判るであらう。

⑬ 我が學界にはこの女則不課をば、次丁女則不課田というように態々文字を加えて、文章を改めて、自からが欲する意味に解釋している學者があるが、これは晉書の著者の杜預らの意圖とは全く相反することであらう。

⑭ この隋書食貨志の一文は、「(上略)客皆注_三家、籍_三其課、丁男調、布絹各二丈、絲三兩、綿八兩、祿絹八尺、祿綿三兩二分、租米五石、祿米二石、丁女並半_レ之、(下略)」とあって、籍_三其課_二の次に一般の丁男及び丁女に對する租調などの公課の規定が載せられている。この句讀點のつけかたは、民國二十五年に上海の大光書局から發行された『中國歷代食貨志』も、私と同様である。この籍_三其課_二と次の丁男調、布絹各二丈、云云とは、別文として取扱わなければならないのである。私は以上のような考えのもとに、拙著『均田法とその稅役制度』の第三章第一節で南朝の土地稅役制度を論じた際には、丁男調、布絹

各二丈、以下を引用掲載したのである。しかるところ、鈴木俊氏は、『中央大學七十周年記念論文集』に掲載された同氏論文「占田、課田と均田制」の頁一九一二において、籍_三其課_二の其課とは、次に來る丁男調、布絹各二丈の丁男につけて、其課_二丁男調、布絹各二丈とすべきを、私が故意に脱漏して丁男としたものであると斷定し、「曾我部博士がこれを脱して論ぜられているのは、甚だ不思議といわざるをえない」と批評されているが、これは全く無實を誣しているのであって、私はこのような脱漏行為はなしていないのである。尙おこのことは、法制史研究第七冊に掲載した拙稿「西涼及び兩魏の戶籍と我が古代戶籍との關係」に詳述してある。

⑮ 賦とは、周禮地官篇の小司徒の職掌に見える貢賦に對して、鄭玄は「貢、謂_三九穀山澤之材也、賦、謂_出車徒_二給_中繇役_上也」と註している如く、元來は車徒を出して軍の徭役に供するの言うのである。

⑯ 北魏以後の唐や五代や我が國でも、蔭附戶の制度が行なわれたことについては、日本歷史第一四九號所載の拙稿「日中の蔭附戶」に論じてある。

⑰ この晉故事の一文は、初學記卷二十七に引用されているのであって、このことを發見したのは吉田虎雄氏であり、同氏の著書『魏晉南北朝租稅の研究』などに引用されている。

⑱ この井稅とは、井田の賦稅ということに他ならず、商務印書館發行の辭源續編には、井賦という熟語をかがげ、その説明として、周禮地官篇小司徒の職掌に、「乃經_三土地_二而井_中牧其田野_一、以任_三地事_二、而令_三其貢賦_二」とある井田法の一文を載せて

いる。

①⑨ この詔は、魏書卷百十食貨志にも、「太和九年、下詔均給天下民田」とある。

②⑩ 周禮地官司徒篇には載師と稱する官があり、その職掌は「掌三任土之法、以物地事、掌地職、而待其政令、云云」と述べており、また均人と稱する官があり、その職掌は「掌均地政、均地守、均地職、均人民・牛馬・車輦之力政、云云」と述べており、更にまた土均と稱する官があり、その職掌は「掌平土地之政、以均地守、以均地事、以均地貢、云云」と述べておる。

②⑪ この墾田の語は、ここでは重要な語をなしている。墾田の語は、我が律令時代にも使用されて、これをハリタと読み、新しく開墾した田を稱するのであるが、中國では、いつの時代でも單に農耕地を意味するのであつて、これは各正史の食貨志や地理志、及び各通典の田制や各通考の田賦考や冊府元龜の邦計部田制などだけを見て明らかなことであり、私もこのことは文化第二七卷第三號掲載の拙稿「北齊の均田法」西嶋定生氏の駁論に答うに述べてある。中國では、新しく土地を開くことを敘述する場合は、必ず墾藝荒田（資治通鑑卷二六九）とか、墾荒田（同上書卷二八八）とか、墾起公私荒田（通典卷十五本註）、墾草田（漢書卷七十七）、開荒地（三國志魏志卷十三）、墾殖荒田、請射荒田（共に文獻通考卷三、四、五、七）とあるように、荒田、荒地、草田などの語がくついつて現われて來るのであつて、單に墾田として現われて來ることはないのである。我が國でも墾田を以て悉く新開墾田の意味に

使用していたかというに、そうでもないものであつて、例えば日本書紀の孝德天皇大化元年八月庚子の條に、「其於倭國六縣、被遣使者、宣造三戶籍并校田畝」とあるところの本註に、「謂檢數墾田頃畝及戸口年紀」とあつて、田畝に對して墾田を當て、田畝と墾田とは同一であるを示していることによつて判るのであらう。しかし大抵の場合は、我が國では新開墾田と解釋していたようである。このように我が國と中國では、墾田の解釋に大きな相違があるが、彼の解釋は單に農耕地を意味することに氣づいたのは、私を以て初めとするのではないのであつて、徳川時代の學者達が既にそのような研究をなし、またそのような解釋をなしていたのである。先ず第一に擧げられるのは、伊藤長胤（東涯）の『制度通』である。この書は享保九年（一七二四）に出來たものであり、その卷八に「墾田並ニ稅糧總數ノ事」という項を設けて、漢代から明代までの墾田についての文獻を掲げて、墾田とは田地のことであると述べており、更には、漢の定墾田、隋の任墾田の文例までも掲げ、定墾田については「定リテ作り付タル田畠ナリ」との解釋までつけている。伊藤長胤の他に、尾張藩の儒者・奥田永業の文化十年乃至十一年頃（一八一三—一四）に著した『治具十三條』の第一田賦考には、「墾は土地を起し反することなり、墾田は天下にて墾耕する程の地を云」と言い、墾田は墾耕する土地であると述べており、また水戸藩の學者の藤田幽谷も、寛政十一年（一七九九）頃に脱稿した『勸農或問』卷上の勸農總論の所で、墾田の語に對して「ツクルベキ田地」という振假名をつけている。以上のように徳川時代の三先哲は、いずれも墾田を以て農

耕地としていたのであって、新開墾地とはしていないのである。三先哲は單に墾田の解釋についてだけでなく、他の事柄でも多くの點で相共通せる解釋を下している。その二、三の例を擧げるならば、復や復除については、制度通卷六には「復ト云ハ其身ノ役ヲユルスコトナリ」と言い、治具十三條の第三戸口考には「復、諸役御免のことなり」と言い、勸農或問卷下には「ヤクヲノゾク」との振假名をつけており、その不_レ事については、制度通は既に本論文の第二節の晉の力役の説明に引用してあるように、「役ヲユルス」と解釋しており、また治具十三條もその所で制度通と同様に「諸役を免ず」と説明しており、同書は更に第三戸口考でも「事と云は諸役のことなり、勿算事とは算賦を免れ、諸役を免ぜしなり」と言い、勸農或問も卷下に「ヤクヲユルス」と振假名をつけている。また周禮の施舍については、制度通卷九に「周禮・禮記ニ載スル（舍及ビ不_レ從_レ政）ハ、ソノ身ノ夫役ヲユルスハカリナリ」と言い、治具十三條の第四職役考には「舍は除也、貴人已下老人病身の者抔は、夫役に使ふ事を除せり」と言い、勸農或問卷下には「（上略）其貴賤老幼癡疾を辨じ、凡_レ征役の施舍を爲す」との振假名をつけており、更にまた課役・課戸・不課戸などについては、制度通は、その卷九では課役について「（上略）三位以上ノ親族並ニ免_レ課役、コレハ終身ノ免役ト見ヘタリ」と言い、卷五では課戸・不課戸について「古ヘハ民家ニ課戸不課戸ト云コトアリ、（中略）課トハ役ノコト」と述べているが、治具十三條の第四戸口考には、「諸役を務る家を課戸と云、不課戸と云は官田・勸田・高年・癡疾の類の課役を除する家也」と言い、勸農或問

（幽谷自筆本）卷下には不課戸について「一戸の主といへども官職ある人か耆・老・篤疾・小子・寡をば不課戸と定む事也」とあり、また課役については「延喜式に凡人生三五男_二成_三正丁_一免_ニ父課役_一、雖_ニ一人闕_一尙從_ニ免除_一といふ事あり、是多く育_レ子ものの徭役をゆるめて民生を蕃くすることを勸む、云云」と言い、不課戸には皆ヤクナシといふ説明をつけ、課役に對して徭役の語を當てておる。このように三先哲共に課役は徭役即ち力役を意味する語であり、その力役を負擔する戸が課戸であり負擔しない戸が不課戸であると定義している。

この三先哲の學問著作については、先ず伊藤長胤について狩野直喜先生は、その著の『讀書叢餘』に收められている「伊藤蘭圃の經學」の中で、「東涯（長胤）は篤實謹厚の君子で、能く家學を紹述し、其の學は博洽にして書として窺はざるなく、詩文に至るまで誠に立派なものであった」と、極めて長胤の人物や學問をほめられており、また狩野先生の高弟の一人である吉川幸次郎博士は、長胤の制度通を校訂して岩波文庫本として出版されているが、その解題で「（上略）この書物は、結果に於て、きわめてすぐれた東亞制度史となっている。（中略）そのすぐれた點は、記述の正確さにある。この書物の中から、記述の誤りを指摘することは、むずかしい。また引用文の誤讀も絶無に近いようである。こうした正確さは、主として東涯の人物によつて生れたと思われる。東涯が篤實な君子人であったことは、數々の挿話が物語る通りである。（下略）」と述べられてこれまた長胤の人物やその著の制度通を絶歎されている。次に

奥田永業については、瀧本誠一博士が彼の著の治具十三條を、その編纂せる日本經濟大典第四十四卷に納れるに當つての解題では、「本書は（中略）東涯の制度通に類するものなれども、制度通の如く煩瑣ならずして、首尾一貫した大著作である」とほめられている。最後の藤田幽谷については、その弟子の會澤正志齋が『及門遺範』において、「先生好讀『周官』、謂、聖人經緯天地、綱紀國家、悉備於此書、其所發明、大抵前賢所未發」とか、「先生講究經史、學無不該」と言い、幽谷は周禮を喜み、前賢の發明することが出来なかつたものを發明したとか、學の該らざるものは無かつたなどと、大いにほめている。長胤ら三先哲の學説が全く同じであるのは、その研究方法が同じであるからであつて、學問の根底を經學、特に周禮に置いていたが故であらう。

ひるがえつて現代の我が東洋史學界を見るに、この北齊の均田法に現われる墾田をば、これを最も早く新開墾田と解釋したのは仁井田陞氏であつて、昭和四年十二月發行の國家學會雜誌卷四三の十二號所載の論文「古代支那・日本の土地私有制」(一)でそのように述べており、これに續いたのが西嶋定生氏(和田博士古稀記念東洋史論叢所收の「北齊河清三年田令について」)であり、更に續いたのが西村元佑氏(史林五〇の二所載「均田法における受田と賦課に關する一考察」)である。これ等の學者達は西域文化研究會なるものを組織していることによつても判る如く、同じ系統の學者であり、従つて同じような研究をして同じような學説を唱えているのである。單に墾田だけでなく課役・課戸・不課戸・復・復除・不事・施舍及びその他につ

いても、同じような解釋を採つており、それ等の悉くが長胤・永業・幽谷らの説とは異なつてゐるのである。仁井田氏等の説のようなことを平中耆次氏も唱えられている(同氏著中國古代の田制と税法所收の「漢代の復除と周禮の施舍」)。ここで私が我が學界の各位に望むことは、仁井田氏らの學説と長胤らの學説のいずれが是であり、いずれが否であるかを、この際、十分に調べて貰いたいということである。眞理は唯一つであるからどちらかが間違つてゐるのである。兩者の學説を虚心平意な態度で十分比較して原典によつて検討を加えれば、誰人も必ずや狩野先生を始めとする諸學者の長胤・永業・幽谷に對する批評の言は、少しも正鵠を失つていないことに氣づかれるであらうし、また現代の我が學界には、いかに多くの誤つた學説が流布されて定説化してゐるかが判るであらう。各位が現状を直視して正邪を辨別し、邪説には惑わかされることなく、正しい研究の道をどこまでも歩まれることを切望する次第である。

②② この一文は隋書卷二十四食貨志にも載せられている。
 ②③ この一文は隋書卷三煬帝本紀にも載せられている。
 ②④ 大唐六典の編纂については、拙著「日中律令論」に述べてある。

②⑤ 通典卷二十三職官篇の戸部郎中の所の本註には、その職掌として「掌三(上略)園宅・口分・永業等」と言い、均田とも井田とも述べておらず、また新唐書卷四十六百官志には、「戸部尚書掌天下土地・人民・錢穀之政・貢賦之差、……戸部郎中・員外郎掌三戸口・土田・賦役・貢獻・蠲免・優復・婚姻・繼嗣之事」とあつて、新唐書もまた、均田とも井田とも言つてお

らない。

②加藤繁博士の没後に博士の傳記を主とした『中國經濟史の開拓』なる一書が復一雄博士によって出版されたが、この書に寄せた和田清博士の序文には、「加藤博士は、就職の關係から京都大學へ行つて、織田萬博士・狩野直喜博士監修の下に清國行政法の編纂に與り、専ら清朝の官制や土地制度、産業や貨幣の調査に當られた。この數年間が眞に博士の修養時代で、その間に後年の博士をして大ならしめる素地を作ったと共に、博士をして經濟史家たらしめる運命を決定したものである」と述べて、加藤博士の學問の基礎は、京都での清國行政法編纂時代に築かれたとしている。

昭和四十二年九月二十五日稿了

追記 上記の註④の中に紹介してある復とか復除は、往復の復の字が轉用されたものであつて、それは養老の賦役令の人在_三狹郷の條文の集解の跡云に、「復、謂令_レ還_三本業_二也、去_三本居_一、已絕_三其產業_二故、云云」とあるように、人が徵發されて本居本業を去つて他所に往つて力役に従つていたのが、ゆるされて本居本業に復えることから、復に力役がゆるされるという意味が生ずるのである。復がこのような意味に用いられた場合の音はホクであつて、そのことは唐の顏師古が漢書の卷一を始めとする各所で「音、方目反」という音註をつけていることによつて判るであらう。この力役免除の意味がある復の字も、漢頃になると、既に租税を免除する意味にも應用されるようになっていたのであつて、それは漢書卷一上の高祖本紀二年二月癸未の條に、

蜀漢民給_三軍事勞苦_二、復勿_レ租稅二歲、(中略)民年五十以上

有_三脩行_一能帥_レ衆爲_レ善、置以爲_三三老_一、(中略)復勿_レ徭戍、

という復が租税の免除にも力役免除にも使用されている例によつて判るであらう。しかし本來の意味はどこまでも力役免除である。そのことは、馬端臨の文獻通考卷十三職役考にも、「古之所_レ謂復除者、復其徭戍」と説明されている。従つて伊藤長胤・奥田永業・藤田幽谷が、復を以て力役免除と解釋しているのは、この文字の本來の意味を述べていたのであつて、正しい解釋である。律令の條文中に使用された場合は、力役免除という意味だけのものではあつて、租税免除のもの使用されていない。そのことは春秋左氏傳昭公二十七年春の條に、「楚_一左司馬沈尹戌帥_三都君子與_三王馬之屬_一以濟_レ師」とある所の杜預の註には、都君子在_三都邑_一之士、有_レ復除者、王馬之屬、王之養_レ馬官屬、校人也、濟益也、とあつて、都君子は復除の特權を持つていると説明しているが、これを唐の孔穎達は數衍説明して正義即ち疏において、都謂_三國都_一、在_レ都君子、明是在_三都邑_一之士也、都邑之士以_三君子_一爲_レ號、故知_レ是有_レ復除者_一、謂_レ優_レ復其身_一、除_レ其徭役、賈逵云_レ然、然今之律令猶名_レ放_三課役者_一爲_レ復除、是漢世以來、有_三此言_一也、此人或別有_三功勞_一、或曲蒙_三恩澤_一、平常免_レ其徭役、事急、乃使_レ之也、と述べている。この唐の孔穎達の説明によつて、唐の律令の中に用いられている復除という語は、専ら力役免除のみを意味するものであることが判るであらう。(昭和四十三年一月十一日、餘白に追記す。)

On the Name and the Actuality of the *Jun-tian* 均田 System

Shizuo Sogabe

The 井田 *jing-tian* system has been traditionally regarded as a system of landownership used during the *Xia* 夏, *Shang* 商, and *Zhou* 周 dynasties. At that time, all the land in the country was public-owned, and the people only used it and benefited by it. According to the *jing-tian* system in the *Zhou* dynasty, every man and his wife as a unit would be allowed to have 100 *mu* as their personal share for planting cereals and in addition a 5 *mu* lot for building houses, keeping livestocks, and planting mulberry trees, etc.

This *jing-tian* system advocated by the Confucianists found expression in the decrees that were basic to the administration of the nation since the time of Emperor *Wu* 武帝 of the *Han* 漢 who adopted Confucianism as the national cult. It changed from legalistic to confucian contents and finally with the decrees of the *Jin* 晉 became entirely confucian.

The *zhan-tian* 占田 and *ke-tian* 課田 system of the *Jin* generally based on confucian decrees, naturally had to parallel the same logic as in the *jing-tian* system; as a matter of fact, their contents were very similar to it. It was Emperor *Xia-wen* 孝文帝 of Northern *Wei* 北魏 who inherited these *Jin* decrees and also adopted the landownership system very akin to them which was known as the *jun-tian* system. This system went on under the Northern *Zhou* 北周, Northern *Qi* 北齊, and *Sui* 隋, and continued as a working system during the *Tang* 唐 until the time of Emperor *De-zong* 德宗, when "Double Tax Method" 兩稅法 was established. In the *Tang* dynasty, the system was officially called the *jing-tian* system. This is clearly shown in the section on a *Hu-bu shang-shu* 戶部尚書 and *Shi-lang* 侍郎 in the *Da-Tang liu-dian* 大唐六典 book 3 and in the section on *Hu-bu shi-lang* 戶部郎中 and *Yuan-Wai-lang* 員外郎 in the *Zi-guan-zhi* 職官志 of the *Jiu Tang-shu* 舊唐書. The name, *jun-tian* system, was at the time merely a popular term.

We may surmise that this might also have been true during the previous periods of Northern *Wei*, Northern *Zhou*, Northern *Qi*, *Sui* and *Tang*, which signifies that the so-called *jun-tian* system not only carried the same name as the ancient *jing-tian* system but also had similar contents in actuality.